

高木俊宏 ギャラリー・トーク

1. 美術家を志した動機

私が美術の道へ進んだきっかけは父の存在が大きく影響しています。父は新世紀美術協会という団体展に出品していて(画像1)主に倉敷や玉島など地元の風景を描いていました。家の中には常に油絵の具の臭いがあり、幼い頃から絵を描くのが好きでした。ただ、高校で入部しようと思った美術部は雰囲気馴染めず特に何することもなく高校時代を過ごしてしまいます。進路決定の時に得意だった美術関係への進学を考え始め、進路先として地元の岡山大学教育学部にあった特美を選び、美術の勉強を始めます。久しぶりに水彩画やデッサンを描いてみると途端に面白くなり徐々に勉強中心の生活から美術に魅力を感じるようになります。1974年大学には合格しましたが、間に合わせの勉強だったため、同級生や先輩たちの少し踏み込んだ美術の話は、ほとんど理解できず戸惑いました。それから展覧会を見たり本を読みノートにまとめたりと受験勉強並みに勉強しました。その結果現代美術を初めとする様々な表現の面白さに興味を持つようになり、よりレベルの高いところで勉強したくなりました。東京芸大に憧れて大学をやめて再受験することも何度か考えたものです。

2. 版画と高原先生との出会い

1年生の前半こそ授業に出ていましたが、徐々に興味を失い自分の作りたい作品ばかりを考えるようになります。その後家を出て一人暮らしをしたい思いを強く持ち始め、1975年大学2年生から岡山市内で一人暮らしを始めます。生活は制作とアルバイトを中心にした生活になり、ほとんど授業に出なくなりました。保守的な絵画指導ばかりの大学の授業に嫌気がさしたことも原因です。大学2年生の後半頃から単なる具象画への関心が薄れ、キュビズムからシュルレアリスムに影響を受けた作品を制作し始めます。特にピカソやライオネル・ファイニンガーの構成的な作品、シュルレアリスムではエルンストに最も関心を持っていました。(画像2)(画像3)

当時作家として大きな影響を受けたのは一時期大学の講師をされていた版画家の高原洋一先生です。(画像4)デザインやシルクスクリーンの講義でしたが、表現について話される先生の授業は魅力的で人気が高く学生がこぞって講義を受けたものです。私は授業後、今考えると大変失礼なのですが、突然作品を持ち込んで見ていただいたりもしたものでした。その頃、日本の美術界では国際展で日本人版画家の受賞が相次いだこともあって版を媒体にした表現に注目が集まっており、先生の影響も加わって徐々に版画を制作するようになりました。私の生活は昼過ぎから登校してアルバイトのないときは夜まで大学の版画教室で制作をするということが続きます。ちなみにその後高原先生は独自のシルクスクリーン版画の表現によりコンクールで受賞を重ね、シルクスクリーンでは日本を代表する版画家になります。近年では2008年に岡山の3つの美術館で大規模な回顧展が開催されました。

版画では初めは銅版画に取り組みました。大学には版画を教える先生がいなかったのが駒井哲朗氏や深沢幸雄氏などの技法書を片手に制作し、わからないことは版画を制作していた卒業生の先輩に聞きながら続けました。その版画表現で最も影響を受けていたのは池田満寿夫氏(画像5)です。特に彼のドライポイントによる線の表現は大きな魅力で、繰り返し模倣もしましたし自分の中ではカリスマ的な存在で彼の著書は全て持っていたと思います。これが銅版画を始めた頃の作品です。(画像6)当時は1週間に数点制作するような早いペースで作品を作っていて画廊喫茶や岡山市内の画廊で二人展を開催しました。画廊会場には油彩画、銅版画、リトグラフなど様々な表現の作品がありましたが、多くは池田満寿夫氏の影響を受けたものでした。1977年彼が芥川賞を受賞しますが、逆に自分の表現は抽象的になり徐々に彼の影響から離れていきました。

そんな時に出会ったのが1978年池袋の西武美術館で開催された「ジャスパー・ジョーンズ展」(画像7)です。2次元と絵画表現という命題を追求しながらも古典的で美しい画面を作り出す作品群には驚き、強く魅了されました。この展覧会は生涯見た中でも五指に入る最も素晴らしいものの一つです。表現対象を絵画という2次元に還元するという行為は自分の作品にかなり長く影響を与えました。またまた同じ頃版画家の井田昭一の作品とコンセプトにも大きな影響を受けています。井田照一氏は関西で活躍していた版画家ですが表面と裏側という概念を版画や平面で表現しました。その頃の私の作品は紙や板を版として利用したリトグラフの表現につながっていきました。それらは卒業制作展に出品しています。(画像8)

学生時代は岡山では思うようにならない作品鑑賞にも飢えていて関西方面に時々出かけて美術館や画廊で展覧会を見ていました。そんなことも上京への気持ちを駆り立てることになり、卒業を控えた大学5年の時、あきらめきれず東京芸大大学院の版画科を受験しますが、あまりに傾向の異なる版画表現に戸惑いを感じました。芸大の方は不合格であることは自覚していましたので、とにかく卒業して上京したいという気持ちは高まるばかりでした。正規の仕事に就く気持ちはなかったのでアルバイトをしていましたが、上京と結婚を同時に満たしてくれるものとして教員採用試験を受験することを選ぶことになります。結果長年の夢だった上京が1980年24歳でかかないです。当時は上京すれば何とかかなるという非常に楽観的な気持ちでした。

3. 現代美術と森俊夫氏との出会い

当時は版画家として制作活動を考えており、大学の卒業制作はリトグラフで発表しました。しかしプレス機が手に入らない状況でしたのでシルクスクリーンで版画を制作することにしました。(画像9) 何度かコンクール等に出品していましたが、シルクスクリーンでの表現にもどかしさを感じることも多く思うような作品が出来ない日が続きました。そんな時、1982年に村松画廊で森俊夫氏の個展(画像10)に出会います。彼は岡山大学を卒業し京都芸大大学院へ進み、アメリカのプラットグラフィックセンターで学び帰国した作家です。岡山で版画展を主催するときに学生の私に声をかけてくれたのがきっかけで知り合いました。今まで彼の版画作品しか見たことがなかったのですが、インスタレーションの要素を持ったその個展で目から鱗のような現代美術の表現と面白さを体験し、個展に憧れるようになりました。それからはタブローの制作が多くなり、初めての個展を同じ村松画廊で1984年開催しました。(画像11) 29歳でした。当時は銀座あたりの画廊と海外の画廊との交流も活発で1984年に日本・オーストラリア交流展を皮切りに海外の現代美術との出会いも新鮮でいつも何かに期待しながらまた触発されることをもともとめて画廊を回っていたように思います。当時は貸し画廊、企画画廊の区別なく現代美術を扱う画廊に活気があって多くの人たちが行き来する時代でした。

1986年浦和の柳沢画廊で初めて企画で個展を開催します。(画像12) この頃の作品は和紙に絵の具をしみこませて色面で構成するような素材感を生かしたものです。この頃はまだ表現には井田照一氏の影響がありました。

しかし、和紙と絵の具によるミニマルな表現は徐々に壁が見えてきて行き詰まり、経済的な事情も重なって個展での発表も少なくなります。(画像13)

4. ペインティングへの回帰

現在の起点になったのが1996年柳沢画廊で開催した個展です。(画像14) 和紙の素材感を生かす仕事から、初個展以来「描くこと」に戻った展覧会でした。長年、描かない作品の反動からかこの前年にはドローイングを含めて140点の作品を制作しました。銀座の現代美術の画廊からは徐々に活気がなくなりつつあるときでしたが、この時期ギャラリー山口、ギャラリーなつかで個展をしています。その後表現対象が具体的なイメージになりながらより簡潔な形をめざしていくようになります。

その一番最初の形がガレリア・ソルでの2000年のセレクション展です。(画像15) 45歳の時です。作品にはアクリル絵の具をずっと使ってきましたが、そのマチエールの問題を解決しようと初めてメキシコの紙であるアマテ紙を使った作品です。形と色彩を思い切って単純にして要素を切り詰めた作品です。翌年に開催した同じソルでの個展が現在の表現の核になるものになりました。(画像16) (画像17) 作品は、表現の要素を問い直しながら簡素化し表現することにより対象物の本質的な部分を伝えようとしています。当時は「熊谷守一に興味がありますか?」「現代美術の熊谷守一のように」などと言う方が多くいましたが、特に彼を意識したことはなく、日本の歴史的な絵画表現に徐々に興味を持つようになります。

その大きなきっかけとなったのは2001年醍醐寺展で出会った俵屋宗達の「舞楽図屏風」(画像18)です。初めて見た時、画面上に配された人物や楽器の隙のない位置取りと躍動感がありながら無駄のない表現、息をのむような美しい色彩にただ呆然とするばかりでした。その会場である東京国立博物館にはその後展覧会の度に足を運ぶようになり、特別展以外の平常展でも多くの日本絵画と出会うようになります。その後狩野派、円山派など江戸絵画の表現により深く関心をもつようになります。

ここで現在特に興味を持っている作家の話について説明します。

琳派の祖と言われる俵屋宗達から約 250 年後に活躍した琳派最後の継承者と言われる鈴木基一。(画像 19)彼は尾形光琳に私淑した酒井抱一の弟子になります。彼の色彩の美しさと装飾性のある鋭い構図は、現代の表現に通ずる斬新さを感じます。

次に天才的なアイデアとユーモラスな表現を兼ね備えた円山応挙の弟子、長沢芦雪は最も魅了された作家の一人です。2006年に奈良県立美術館で開催された応挙と芦雪師弟展、(画像 20)彼個人の展覧会は2011年、ミホミュージアムで大回顧展が開催されました。大胆で緻密な構成の中にゆったりと表されるユーモラスな表情にいつも驚かされます。また現在東北復興を祈って開催されているプライスコレクション展「江戸絵画の美と生命」展にも芦雪の代表作が出品されています。

狩野派の中では狩野山雪は重要な作家です。家康の後を追った狩野探幽ら江戸狩野と別れ京都に残って京狩野を継承した狩野山楽の弟子です。今年2013年京都で師の山楽・山雪の師弟展が開催されました。(画像 21)これはその山雪の作品ですが、垂直と水平を生かしながら大胆にデフォルメされた老梅のうねるような感情表現は日本の絵師が生み出した作品の中でも唯一無二、独自の存在感を持っています。

現在、特に関心を持っているのは南画の表現、特に池大雅です。徹底した簡略化の中に物語性と叙情性豊かな表現が深く感じられます。(画像 22)生命力に満ちた風景の表現は人物と風物が融合され悠然とした大らかさを感じさせます。またその木々、山々の表現は単位的な形を繰り返しながら全体を構成していく手法に私自身興味を持っています。

日本画に用いられる岩絵の具の美しさに見せられてここ数年は岩絵の具とアクリル絵の具を併用したり混色して表現するようになりました。下地に使用した様々な紙も岩絵の具のマチエールのおかげでいい絵肌を得ることができるようになりました。

5. 現在、そして今後への表現

私の表現は船や器のような具体的なイメージを簡略化しデフォルメしていくことから始まりましたが、徐々に具象的になり身近な日常の中に見かけるものへの関心が強くなってきました。現在では近所の木々や草花、レモンなど植物に興味を持つことが多くなっています。

こちらに展示してあるホオズキやサンキライはこのような状態でリビングの隅に長い間置いてあるものです。(画像 23)そのラフスケッチから作り出されたのが展示してある作品です。「華」(画像 24)という作品はその木が基になっています。この作品はサンキライを表現するときに描いた球形の実の形を表現するために円形を使って表現したところからきています。この作品から展開したのが同じく今回展示している「イチョウ」の連作です。春、上野で見かけたイチョウがまばゆいばかりに新しい葉を出しているのに見せられて「イチョウの春」(画像 25)を描きました。それからは普段目に留めなかったイチョウが気になり始めDMに掲載した「イチョウの夏」を描き、秋になるとどんな色遣いを見せてくれるのだろうと思い、想像したのが「イチョウの秋」です。紅葉の季節になる頃、本当の「イチョウの秋」をまた描いてみたいと思います。わかりにくいとは思いますが、このあたりになると先ほど申し上げた南画の表現、特に池大雅の描いた山水画を意識しながら円形やドットという単位体で樹木を構成しています。

もう一つ最近私の中で重要な表現になっているのが鉛筆画です。鉛筆画については村山槐多が描いた「樗」(画像 26)という作品に以前から憧れていました。特に2011年から2012年にかけて岡崎市で開催された大回顧展で再会して表現してみたいという思いが強くなりました。晩年の21歳に描かれたこの作品は鉛筆と木炭を併用しており、強い生命力を感じさせると同時に折れた枝が不吉さを暗示する秀作です。私が鉛筆画を初めて発表したのは2年前の震災のチャリティー展でした。鉛筆は10Hから10B、シャープペンは0.3ミリのものを2Hから2B、0.5ミリのものを4Hから4Bまで準備して描きます。主に樹木を描いていますが、表現のコンセプトとしてはペインティングと同じです。ただ描画材料が鉛筆やシャープペンという最もシンプルなものであるため描く対象物の表現要素を意図したものに純粋に還元、提示できることに興味を持っています。

今後どのような展開になるかは描く対象物との出会いによって変わってくるでしょうが、その対象物を自分というフィルターを通して表現するという点は追求していきたいと思っています。何

気ない日常の中で見かける風物から触発されるもの。そのイメージが特別な日常へと転化され、また増殖されていくような面白さと美的な表現を提案していきたいと思います。